

シリーズ

かほく
市の

文化財 No.49

遺跡 編 鉢伏茶臼山遺跡

今回は、かほく市鉢伏にある市指定文化財の鉢伏茶臼山遺跡について紹介します。

鉢伏茶臼山遺跡は、鉢伏の集落の背後（北側）にある標高58mほどの茶臼山に位置し、主に弥生時代後期の北陸地方で初めて確認された高地性環壕集落です。昭和55年から数次にわたり発掘調査が行われました。

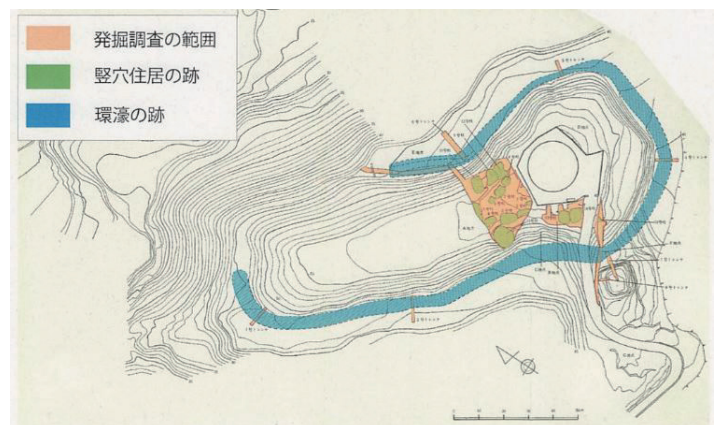
そもそも環壕とは、山の斜面に壕を掘り巡らしたもので、弥生時代後期から末にかけて各地で起こっていた争いに備えたものになります。鉢伏茶臼山遺跡の場合、全てを発掘したわけでは無いので推定になりますが、総延長約355m、幅約4～6m、深さ約1.4～3m以上の規模になります。環壕の内部は、竪穴住居が少なくとも15棟を発掘調査で確認しました

が、実際に争いがあつた痕跡そのものは確認されていません。また、周辺の環境をみると、鉢伏茶臼山遺跡からは、麓から河北潟に向かって広がる低湿地（現・水田）を望むことが出来る環境にあります。もしかすると、その当時も眼下の低湿地を利用し、米作りをしていたのかもしれない。

鉢伏茶臼山遺跡は、かほく市鉢伏の弥生時代後期の様子を物語る重要な遺跡といえます。



鉢伏茶臼山遺跡
の模式イメージ図



発掘調査により確認された
鉢伏茶臼山遺跡の主な遺構

鉢伏茶臼山からは、その当時、主に森・上山田・下山田など低湿地が望めます。弥生時代の水田は、現代の水田のように整然とした形ではなく、環境を上手く利用していたものとみられます。